



好酸性濾胞性腫瘍の細胞診

亀山 香織

慶應義塾大学病院病理診断科部長

はじめに

甲状腺濾胞性腫瘍の中で、好酸性細胞が腫瘍の大部分(75%)を占める亜型を好酸性濾胞性腫瘍と呼び、さらに腺腫と癌に分類される。好酸性細胞は腺腫様甲状腺腫でも稀ならず出現する。好酸性細胞で構成される腺腫様甲状腺腫、濾胞腺腫、濾胞癌の組織学的鑑別は通常の種類のものと同様の方法でなされる。本稿では、穿刺吸引細胞診において好酸性濾胞性病変が疑われた場合に推定診断を行うプロセスにつき概説する。

そもそも、細胞診のうち濾胞性病変は最も正診率が低く、観察者間の意見の相違の大きい分野である。甲状腺癌取扱い規約第7版では、“細胞学的所見のみから濾胞癌と濾胞腺腫を区別することは困難”であると記載されている¹⁾。しかし、伊藤病院では細胞診で濾胞性腫瘍を疑った場合に採取された細胞量、細胞重積、細胞異型からfavor benign, borderline, favor malignantの3

カテゴリーに亜分類²⁾³⁾し、その後の治療の判断材料の1つとしている。この方式は日本甲状腺学会で作成した甲状腺結節取扱い診療ガイドライン⁴⁾でも採用されている。一方、好酸性濾胞性腫瘍では通常の種類と比べ濾胞構造をとることが少なく、核が濃染傾向にあり、良性病変であっても少なからず核異型が認められるといった組織学的特徴があるため、通常の種類とは異なる細胞診断の基準が必要となる。こうした内容を記載した書籍は少ないと思われるた

め、本稿ではわれわれが日常行っている診断手順を紹介してみたい。

好酸性細胞が目立つ腺腫様甲状腺腫(図1)か、好酸性細胞型濾胞腺腫(図2)か(表1)

通常の種類甲状腺腫と濾胞腺腫との鑑別と同様、腺腫様甲状腺腫ではコロイド背景であり、二次性変化の産物である泡沫細胞の出現が認められる。一方、腺腫では背景のコロ

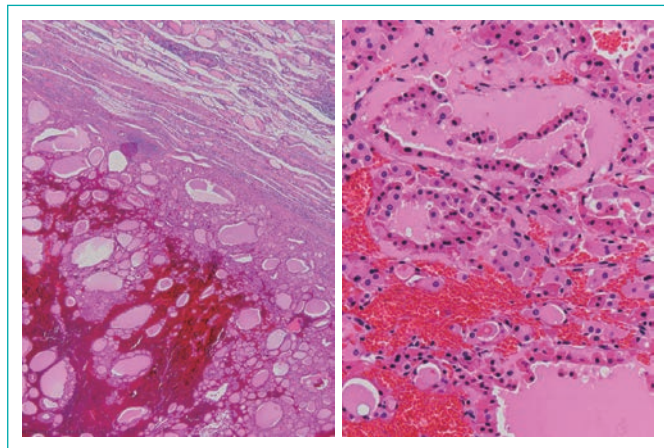


図1 好酸性細胞が目立つ腺腫様甲状腺腫